

教師はなぜキレるか

―ヒューマン・スケールの学級規模・学校規模を問う―

三輪 定宣

はじめに

「キレる」子どもの陰に「キレる」教師の問題が隠れているようだ。子どもたちの心の奥には「キレる先生」への不信が渦巻いている。いま、小学生の七割、中学生の九割が三〇人以上の学級で毎日を過ごしている。子どもと教師との陰湿な人間関係の要因、背景は複雑多様であるが、その根っこにヒューマン・スケール（人間的規模）やパーソナル・スペース（一人ひとりの空間）を失った過大・過密な教育環境の問題がある。

るのではなからうか。この観点から学級規模・学校規模改善の意義を考えてみたい。

一、先生はすぐキレる ―子どもたちのSOS―

私は今年四月、大学の教育学の授業で、受講する約一〇〇人の学生（主に一年生）に子どもの教師観を聞き取る宿題を出した。「今、学校の先生に言いたいこと」というテーマで子どもにインタビューし、生の声になるべくありのまま再現して報告するという課題である。自分の体験をもとに作文を書いてもよいことに

したが、このケースは少数であった。入学直後の教育学部の学生にはとくに関心のあるテーマのせい、身近な子ども―弟や妹、親戚の子、塾・家庭教師の教え子、出身校の後輩、街や公園で出会った子どもたちから、その本音をさぐる熱心な取り組みが目立った。こうして集まったレポートには子どもたちの教師批判が氾濫し、あたかも「キレる」教師についての証言集となっている。いくつかの例をあげてみよう。

「厚化粧ババア」「とにかく嫌い」「ムカつく、殺す」「ハナから信用してはいない」「ウーン、先生超いや」「先生にいたいことはない」「バカヤロウってかんじかな。うん、悪口しか出てこないな」「とにかくむかつく以外の何物でもない」「いいイメージの先生、一度も出会ったことがない」「気違い」「不満が」ありすぎてわかんない」「えっと。きらい。早く死んでほしい。だっていじわるだから。」「先生のいい所、いい面ってない」「特にない。だって他人だもの」「頼りない、自分のことしか考えていない、生徒のことわかっていない」

具体的には―「自分の機嫌で奴（まま）当り」、「お前らふざけんじゃねえ。最低の人間だ。人間」のクズ

だ。犬のフン以下だ。」といった。「『お前には笑顔は似合わない』といわれた（いい点をとると）『誰かのプリントをうつしたにきまっている』とプリントを破る」「先生こわい。おこりすぎ。めっちゃめっちゃおこるの」「いばり過ぎ。常におこっている」「口うるさい」「すぐキレる」「すぐたたく」「すぐ怒鳴る」「感情で動く」「ヒステリック」「気分屋」「自己中心的」「口が悪い」「好き嫌いが激しい」「ひいきする」「見下す」「偉そうにしている」「いばる―生徒を格下扱い」「傲慢」「横柄」「態度が大きい」「せこい」「ずるい」「校長・主任にベコベコ」「やる気がない」「ロリコン」「セクハラ」。授業が「つまんない」「むずかしい」「くだらない」「わからない」「はやい」などなど。

子どもたちの教師不信の根深さは私の予想、想像を超えていた。その原因、背景については議論百出であるが、ここでは教育における規模と密度の視点からこの問題を考察し、学級・学校規模改善の論拠を提起してみよう。

二、ヒューマン・スケール of 思想

世界保健機構（WHO）は学校・学級規模のあり方についてつぎのように指摘している。

「近年、子供の教育機関を組織する際に従うべき原則に関して、有識者による実に多くの著作及び報告書が発表されているので、ここであらためて議論する必要はあるまい。それらはすべて、大規模な機関においては回避することのできない規則及び規制を回避するためには、教育機関は小さくなくてはならない——カーティス報告が提案した生徒百人を上回らない規模——という点で意見が一致している。非人格的な規則ではなく、人間的な関係に基づいたインフォーマルで個性的な教育は、こうした条件のもとで初めて可能になる。教育の内部の集団の規則に関しても相違はまったくなく、小さな規模を保たなければならぬという考えで完全に一致している。」

このようにWHOは、学校規模は一〇〇人以下、学級は小さいこと、という基準を提示している。学校では話し合いによる理解と納得など、人間的な関係に基づいたインフォーマルで個性的な教育がいのちであり、非人格的な規則や規制は教育を破壊するという。

ヨーロッパでは概して学校・学級規模が小さく、例

えば、いまでもフランスの小学校の平均子ども数は一〇〇人以下、学級規模は二〇人台以下である。

人間が人間を人間に発達させるという教育の本質に照らし、教育機関である学校では人間的規模が保たれ、人間らしさあふれる人間共同体として存続しなければならぬ。ヒューマン・スケールがあらためて問われる必要がある。

「ヒューマン・スケール」(human scale)の理論とは、「人間の身体からすべての基準と単位が派生する」、「人間は万物の尺度である」という考えであり、本来、建築学の用語であるが、今日では現代社会批判の思想的論拠ともなっている。

動物行動学や人類学によれば、人類は文明が発達する以前の期間、そのおよそ五〇〇万年にわたる歴史の九九・九%を数十人程度以下の人口やその密度の少ない共同体で生活し、その過程で相互の連帯や思いやりの心が育まれ、遺伝子に刻まれ、それが人間の本性——共同性——を形成してきたといわれる。共同体が人間をつくりあげたのである。しかし、文明の発生とともに、共同体が衰退・崩壊して都市が発達し、人口とその密度が増大し、小さな共同体で維持されていた人間的規

模が失われる。とくに現代文明や資本主義社会では規模の大きさや成長などスケール・メリット(巨大信仰)に取り憑かれ、ヒューマン・スケールが喪失し、とりわけ大都市では人間疎外・人間性破壊が進行する。その事態を動物学者のデズモンド・モリスは「人間動物園」と表現し、現代社会を根底から批判している。³⁾ 学校も学級も「人間動物園」になっているのではないかとヒューマン・スケール理論⁴⁾とも関連し、近年、人間らしい空間とはなにかを探索する「パーソナル・スペース」(Personal space)の研究も進展している。人間には、ゆとりある空間、人口過疎の状態での長年の生活のもとで、人間の本性としてパーソナル・スペース「人のなわばり」「その人専用の空間」「身体衝動」が形成されているらしい。それは他人の侵害を許さない境界領域であり、それが侵されれば強い情動反応―不快反応が生じるという。それは状況による違いや個人差もあり、人によりイライラが爆発したり病的症状になる場合もある。ネズミの実験では、狭い空間でオスとメスのつがい子どもを何世代も生ませると、やがて不妊、死産、子育て不能、異常な攻撃、共食いなどの行動衰退が起こり、種が死滅に向かうというデ

ータがある。総じて過密は動物に病的環境なのである。学校は子どもや教師が、ラッシュアワーのような一時的機会ではなく、一日の大半を過ごす場所である。それだけに子どもや教師のイライラやストレス、「荒れ」、いじめ、暴力、不登校、退学、学習意欲の低下、燃え尽き症候(バーンアウト)などさまざまな問題行動や病理は、ヒューマン・スケールやパーソナル・スペースを喪失した過大な規模、過密な空間と深く関係しているのではないか。

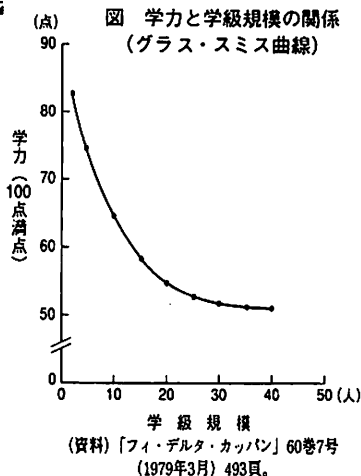
「人間は裸のサル」である。人類史上、わずかの期間にすぎない現代社会のもとで、人間がそれに適応できるように本性を変えられないとすれば、現代社会や学校を「人間の本性」に適合したゆったりした空間のもとで共同・連帯して生活ができるような人間らしさあふれる場所に変えていかなければならない。学校は人間共同体の最後の温存であり、その継承の拠点である。学級・学校の規模や空間、密度の人間的変革は教育改革の根幹でなければならない。

図は学級規模と学力の関係を示した「グラス・スミス曲線」である。それは一九七八年、アメリカ、コロラド大学のスミス、グラス両教授が発表したもので、

過去五〇年間の関係論文三〇〇の統計学的分析の成果である。それによれば、学級規模が二五人くらいから学力が急上昇する傾向が一目瞭然である。これには反論もあるが、最近のアメリカの研究状況では、少なくとも学力の低い子や障害のある子には小さな学級は効果が大きいことが合意となっているという。このグラフの方程式は、学級規模と教師一人当りの子ども指導時間、または子ども一人当りの教室の広さとの関係(反比例)を示す方程式とほぼ同じカーブを描く。学級規模が小さくなれば、教室の過密が改善され、ゆったりとした空間のもとでの子どもと教師との対話や学習の時間も確実にふえる。教育のヒューマン・スケール、パーソナル・スペースの回復である。人間関係、教育関係が改善され、子どもの学校や教師への親しみが増し、指導がゆきとどき、勉強がわかり、楽しくなり、結果として学力も向上するであろう。それは常識にもなっている。

「二五人以下学級」の実現は二一世紀に託された人類史的課題というべきである。

図 学力と学級規模の関係
(グラス・スミス曲線)



【註】

- (1) カールバトリック・セール、里深文彦訳『ヒューマン・スケール』一九八七年、講談社
- (2) 江原昭著「人間の起源と進化」一九八七年、日本放送出版協会 馬場悠男「人類の起源」一九九七年、集英社
- (3) デズモンド・モリス、矢島剛一訳「人間動物園」一九七〇年、新潮社
- (4) 渋谷昌三「人と人との快適距離」一九九〇年、日本放送出版協会
- (5) ハリス、M、クーパー(ミズリー・コロンビア大学)「第一期計画・教師対生徒の減少と学力の効果」『補償教育計画・協会議事録』(ワシントン、一九八六年六月一七—一八日)(全二四頁の報告書。学級規模と学力に関するグラス・スミス論文ほか多数の論文を検討)。概括では、学級規模と学力の関係は論争テーマだが、その過程で「小さな学級規模は学力の低い子や障害のある子にとって最も有効である。」というコンセンサスが生まれているとのべている。